

### 3 不登校児童生徒支援について

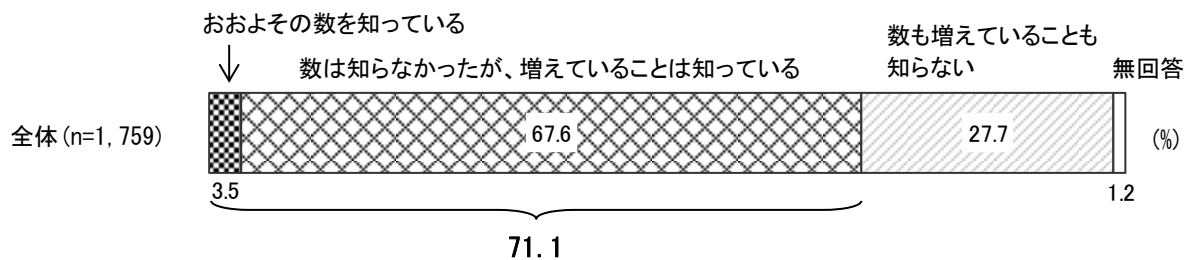
#### （１）不登校児童生徒数増加の認知度

◇『知っている（計）』が7割を超える

問23 不登校児童生徒は年々増加しており、令和5年度の県内公立小中学校における不登校児童生徒数が1万4,300人であることを知っていますか。（○は1つ）

※ 不登校児童生徒数は小学校が5,713人で、前年度の4,600人より1,113人増加し、中学校が8,587人で、前年度の7,482人より1,105人増加しています。

<図表Ⅱ－3－1>不登校児童生徒数増加の認知度



不登校児童生徒数の増加の認知度を聞いたところ、「おおよその数を知っている」（3.5%）と「数は知らなかったが、増えていることは知っている」（67.6%）を合わせた『知っている（計）』（71.1%）が7割を超えている。

一方、「数も増えていることも知らない」（27.7%）は約3割となっている。（図表Ⅱ－3－1）

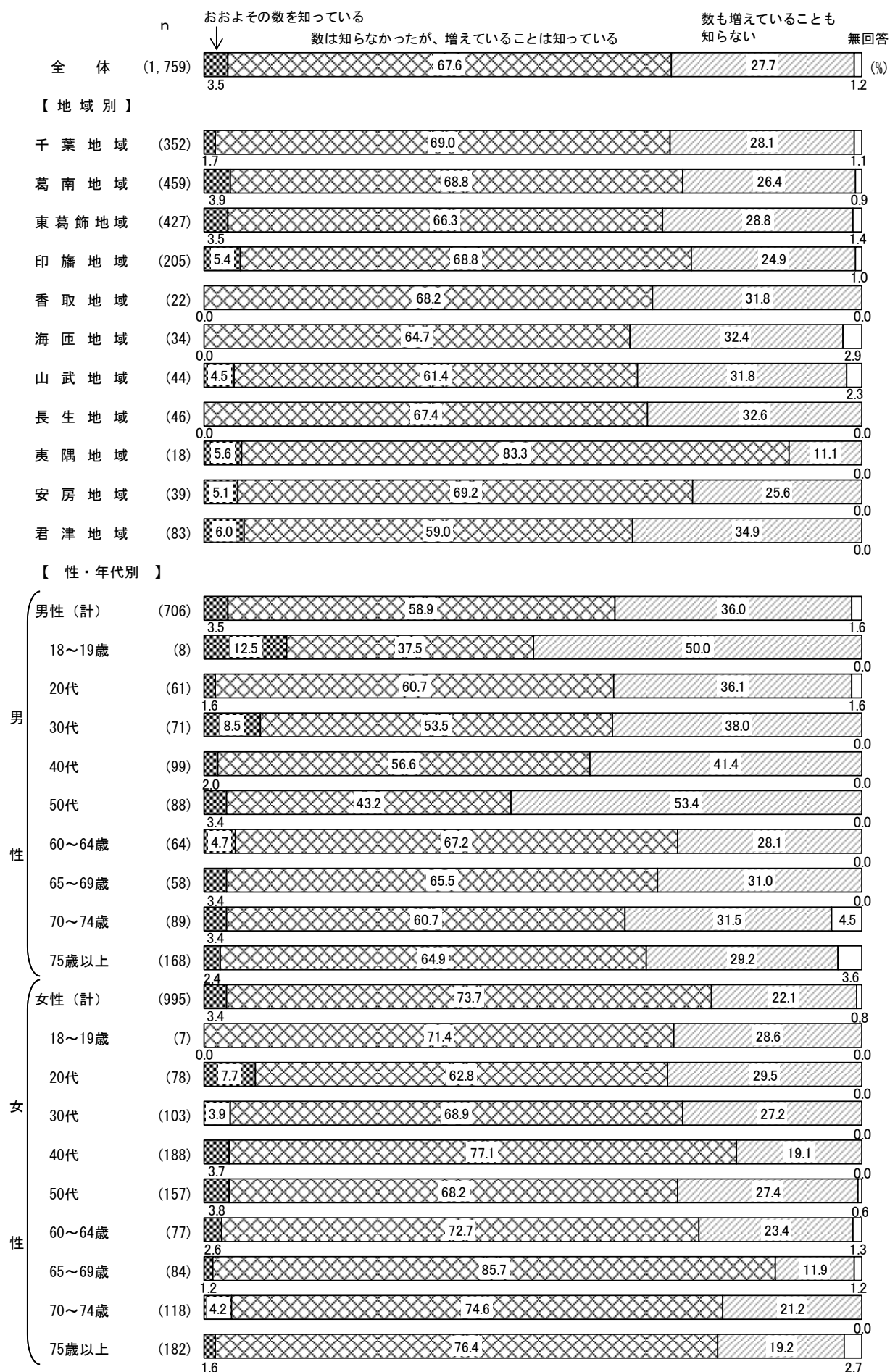
#### 【地域別】

地域別で大きな傾向の違いはみられない。（図表Ⅱ－3－2）

#### 【性・年代別】

性・年代別にみると、『知っている（計）』は女性の65～69歳（86.9%）が8割台半ば、女性の40代（80.9%）が8割、女性の75歳以上（78.0%）が約8割で高くなっている。（図表Ⅱ－3－2）

&lt;図表Ⅱ－3－2&gt;不登校児童生徒数増加の認知度／地域別、性・年代別

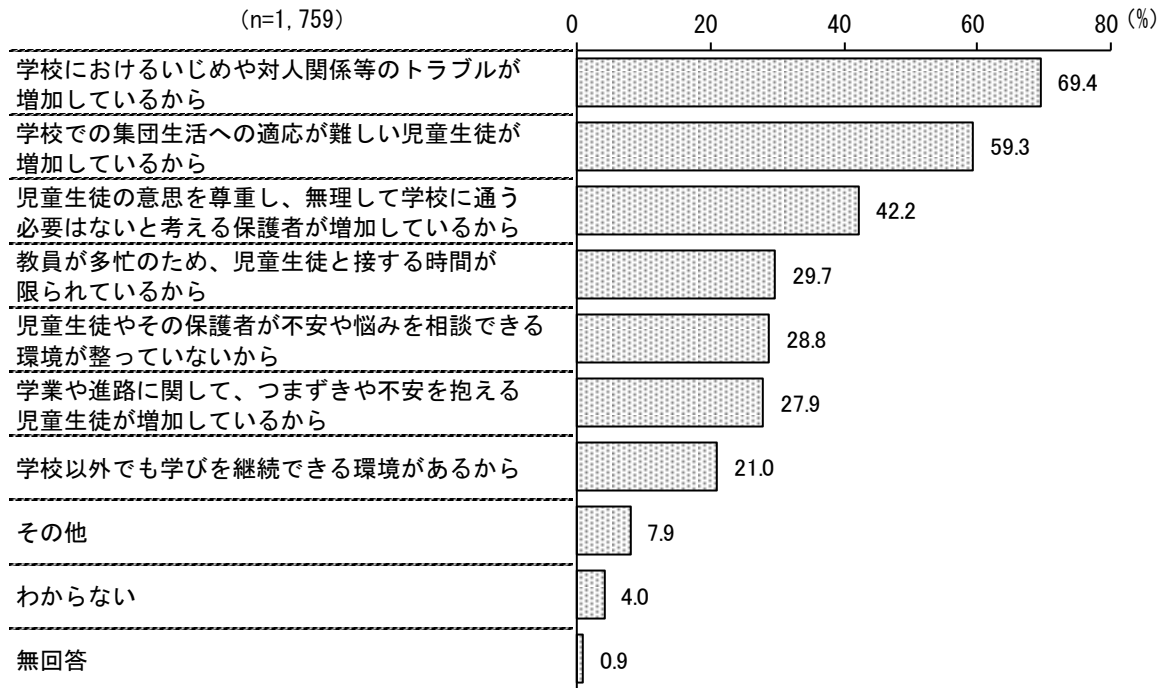


## （２）不登校児童生徒数の増加理由

◇「学校におけるいじめや対人関係等のトラブルが増加しているから」が約７割

問24 不登校児童生徒数が増加している理由は何だと思いますか。（○はいくつでも）

＜図表Ⅱ－３－３＞不登校児童生徒数の増加理由（複数回答）



不登校児童生徒数の増加理由を聞いたところ、「学校におけるいじめや対人関係等のトラブルが増加しているから」（69.4％）が約７割で最も高く、以下、「学校での集団生活への適応が難しい児童生徒が増加しているから」（59.3％）、「児童生徒の意思を尊重し、無理して学校に通う必要はないと考える保護者が増加しているから」（42.2％）、「教員が多忙のため、児童生徒と接する時間が限られているから」（29.7％）が続く。（図表Ⅱ－３－３）

### 【地域別】

地域別で大きな傾向の違いはみられない。（図表Ⅱ－３－４）

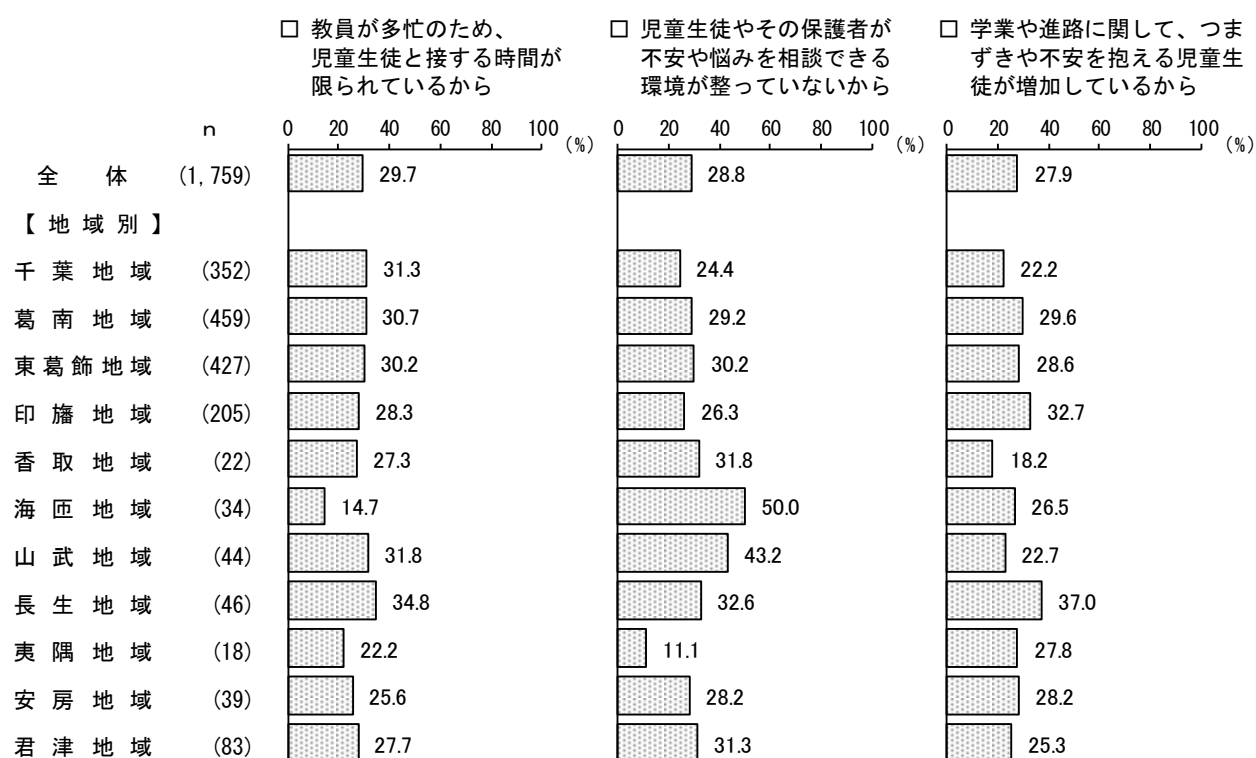
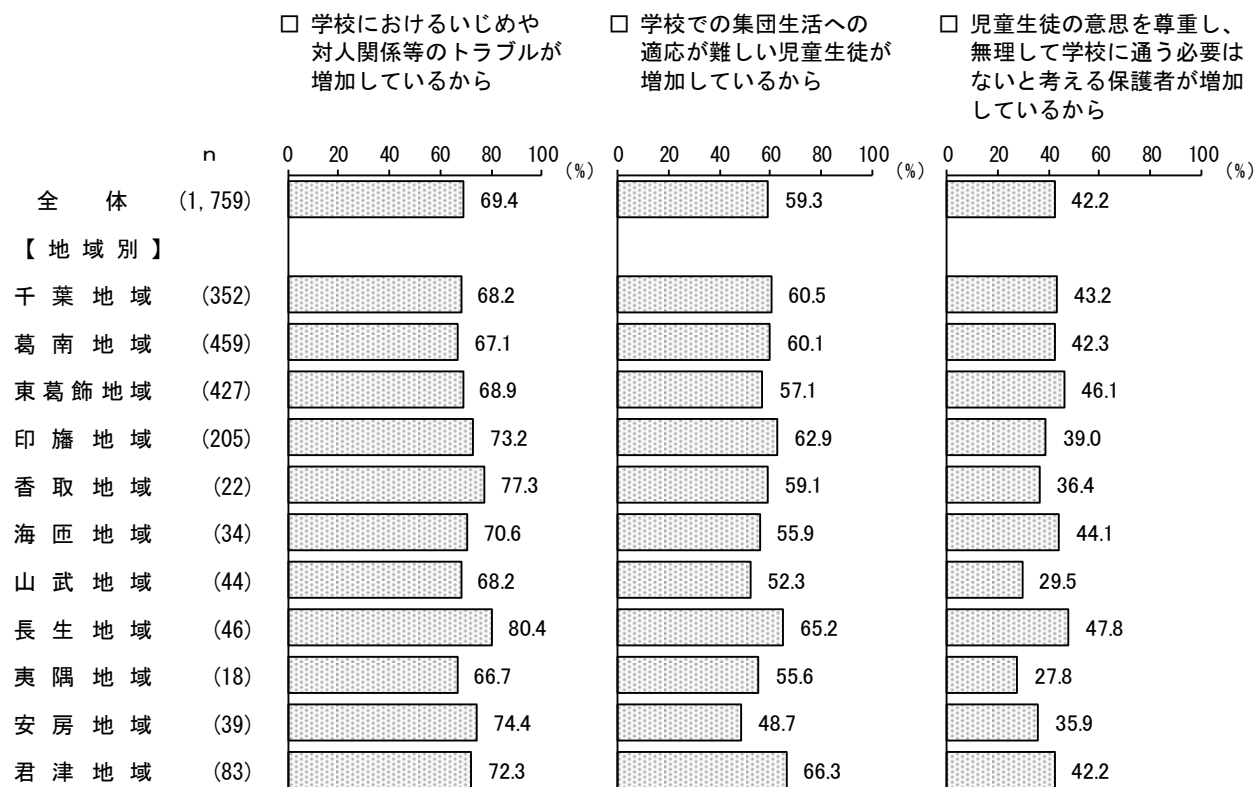
### 【性・年代別】

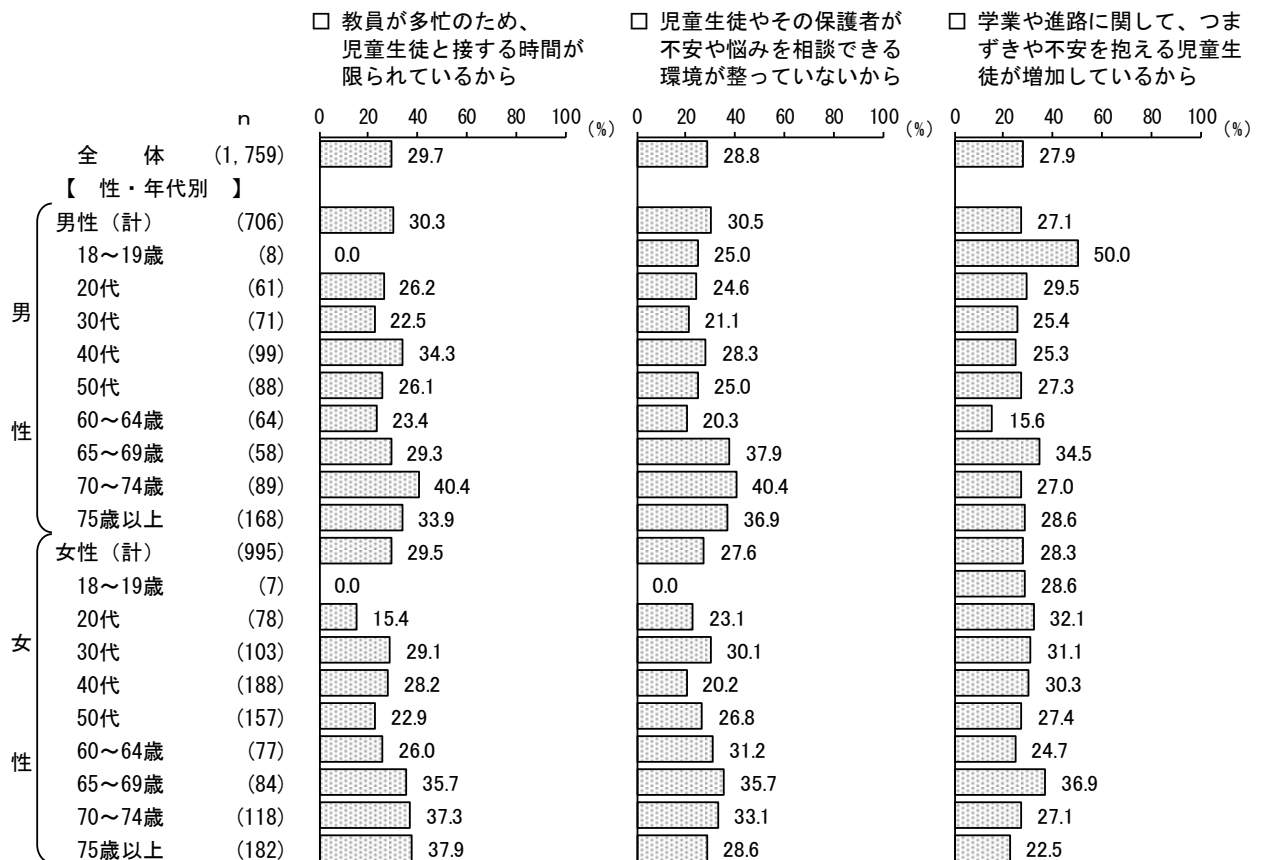
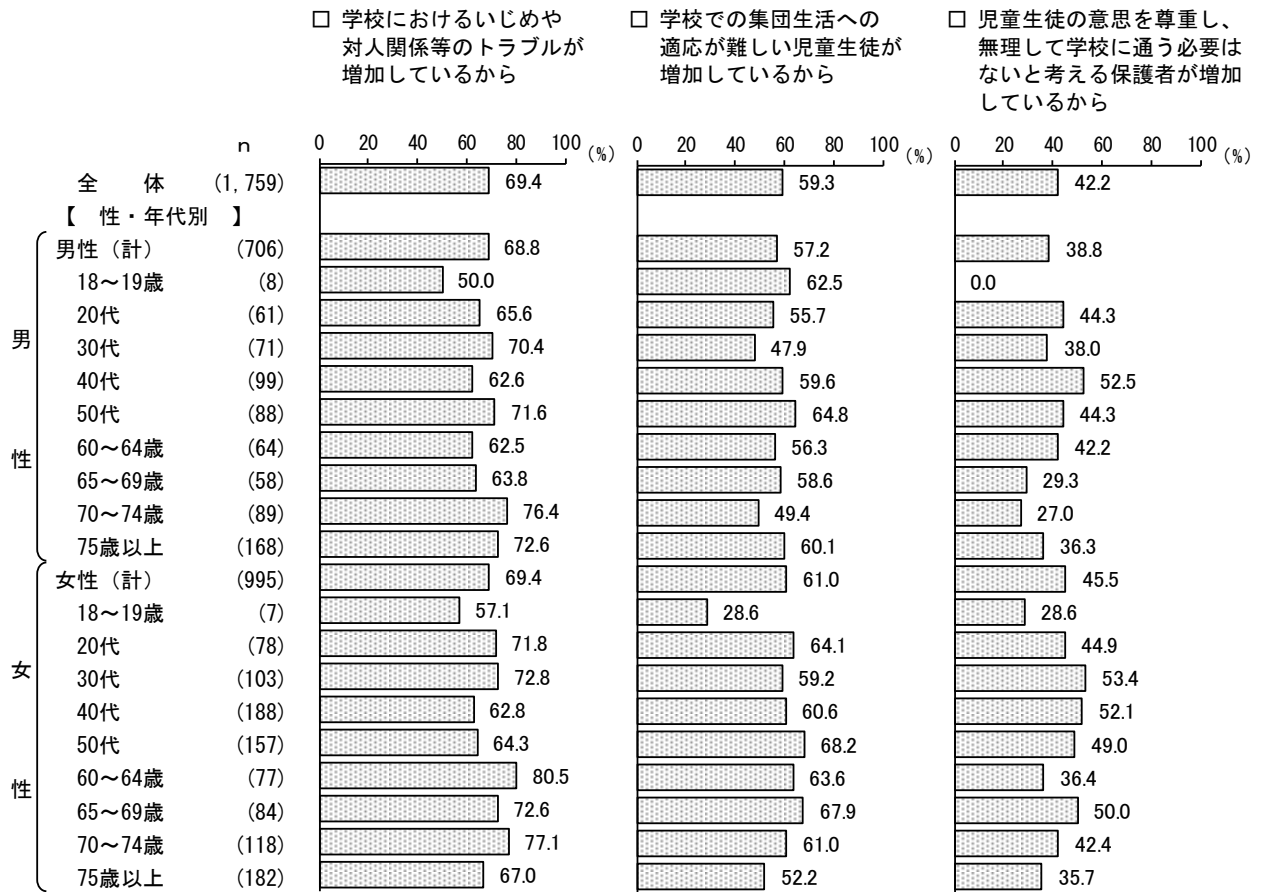
性・年代別にみると、「学校におけるいじめや対人関係等のトラブルが増加しているから」は女性の60～64歳（80.5％）が8割で高くなっている。

「学校での集団生活への適応が難しい児童生徒が増加しているから」は女性の50代（68.2％）が約7割で高くなっている。

「児童生徒の意思を尊重し、無理して学校に通う必要はないと考える保護者が増加しているから」は女性の30代（53.4％）、男性の40代（52.5％）、女性の40代（52.1％）が5割を超えて高くなっている。（図表Ⅱ－３－４）

<図表Ⅱ－3－4>不登校児童生徒数の増加理由（複数回答）／地域別、性・年代別（上位6項目）





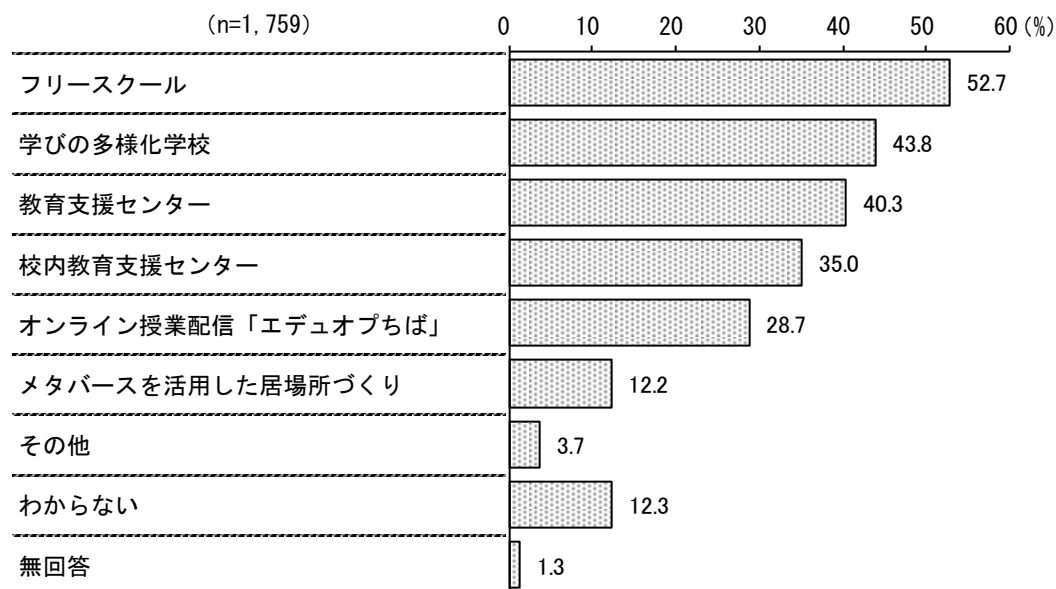
### （３）不登校児童生徒への支援で有効な取組

#### ◇「フリースクール」が５割を超える

問25 あなたが、不登校児童生徒への支援として有効だと思う取組は何ですか。

（〇はいくつでも）

<図表Ⅱ－３－５>不登校児童生徒への支援で有効な取組（複数回答）



- ※ 「１ 教育支援センター」とは、不登校児童生徒に対して、教科の学習、体験活動、カウンセリングなどを行う施設のことです。
- ※ 「２ 校内教育支援センター」とは、学校へ登校できるものの、自分のクラスに入りづらい児童生徒の居場所や学びの場となる、学校内の空き教室等を活用した部屋のことで。
- ※ 「３ オンライン授業配信『エデュオプちば』」とは、県教育委員会で実施している不登校児童生徒を対象とした双方向型の授業配信です。（対象は小学校４年生から６年生及び中学生）
- ※ 「４ 学びの多様化学校」とは、不登校児童生徒の個々の状況に配慮した特別な教育課程を編成できる学校のことで。
- ※ 「５ フリースクール」とは、体験活動などを通じた居場所の提供や学習支援など、様々な取組により、不登校児童生徒等を支援する民間団体のことで。
- ※ 「６ メタバースを活用した居場所づくり」とは、仮想空間であるメタバース上で、自身の分身であるアバターを使い、チャット機能などで相手と交流できる場を提供する取組のことで。

不登校児童生徒への支援で有効な取組を聞いたところ、「フリースクール」（52.7%）が５割を超えて最も高く、以下、「学びの多様化学校」（43.8%）、「教育支援センター」（40.3%）、「校内教育支援センター」（35.0%）、が続く。（図表Ⅱ－３－５）

#### 【地域別】

地域別で大きな傾向の違いはみられない。（図表Ⅱ－３－６）

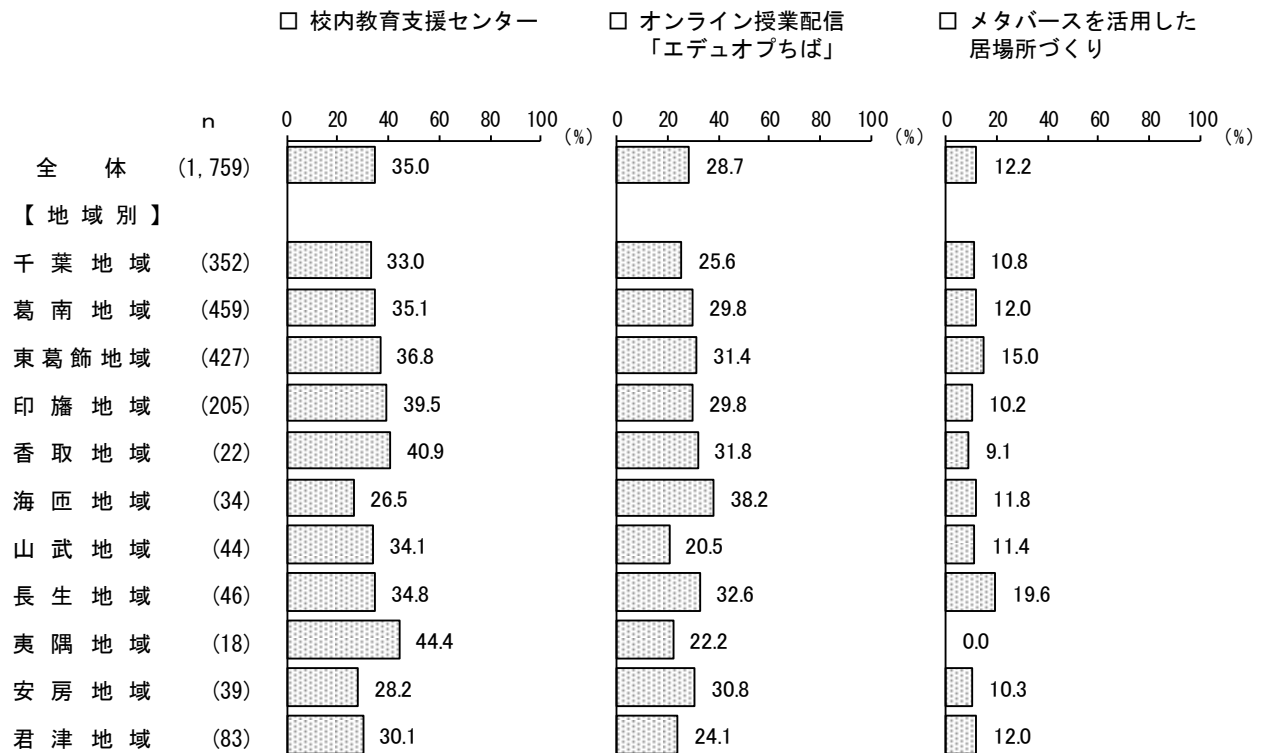
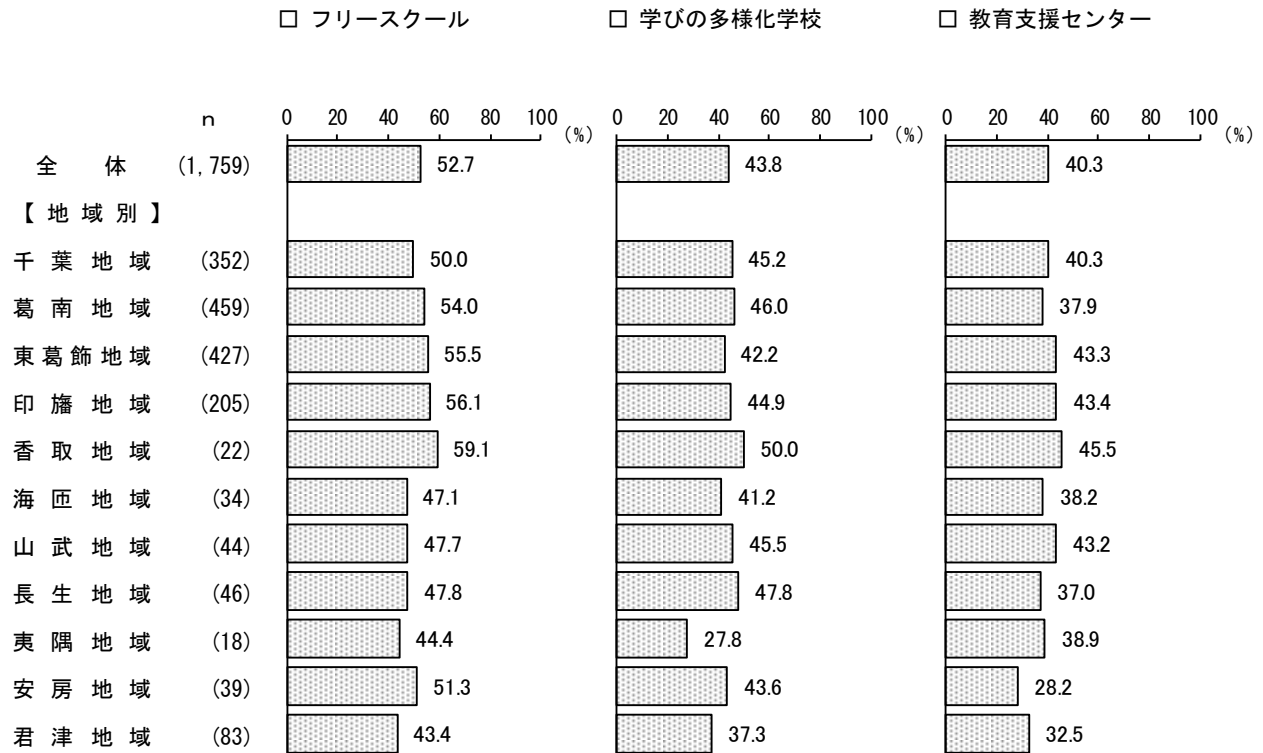
#### 【性・年代別】

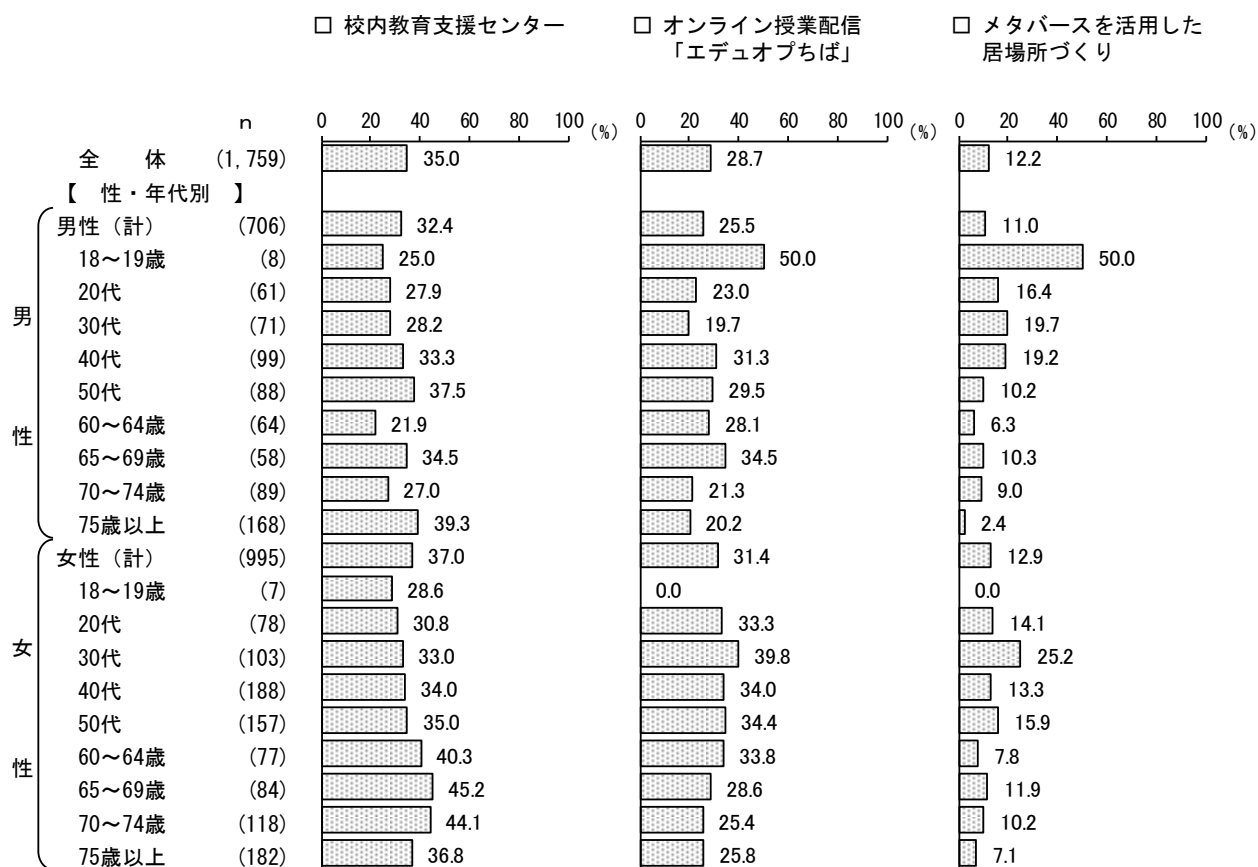
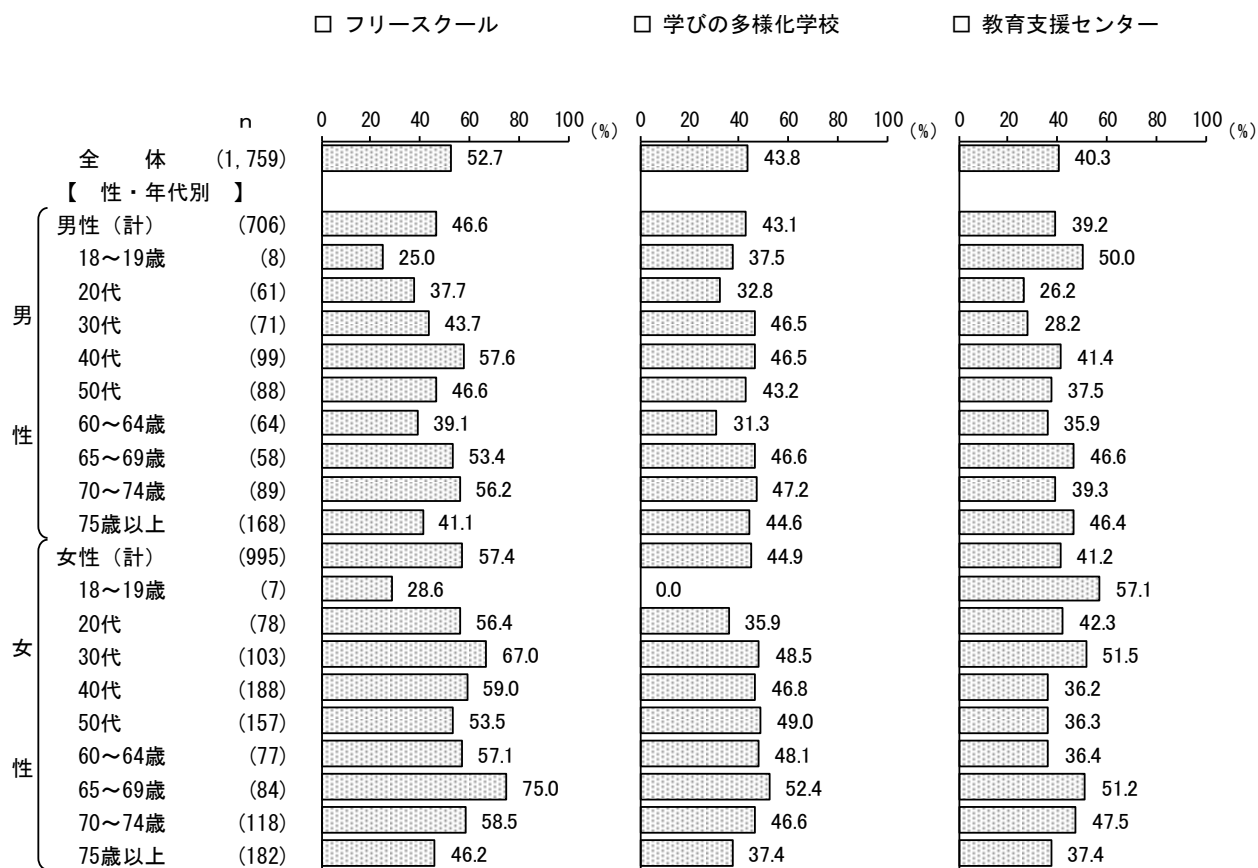
性・年代別にみると、「フリースクール」は女性の65～69歳（75.0%）が７割台半ば、女性の30代（67.0%）が約７割で高くなっている。

「教育支援センター」は女性の30代（51.5%）と女性の65～69歳（51.2%）が5割を超えて高くなっている。（図表Ⅱ－3－6）

＜図表Ⅱ－3－6＞不登校児童生徒への支援で有効な取組（複数回答）

／地域別、性・年代別（上位6項目）







このほかにも、「不登校児童生徒支援について」や問23～問25について、ご意見やご提案がありましたらご自由にお書きください。

ご意見やご提案を自由に記述していただいたところ、231人から回答が寄せられた。一部抜粋してご意見を記載するものとする。

■「不登校児童生徒支援について」の自由回答（抜粋）

- 不登校の子どもたちの中には、行きたくない理由が明確にない子もいるだろうし、うまく言語化出来ずに苦しんでいる子もいると思います。自分もそうでした。学校も親も本人が動けるようになるまで待ってあげてほしい。（女性、40代、葛南地域）
- 不登校児童本人も自身で色々と考えています。軽いアドバイスなら良いのですが過剰に干渉するとプレッシャーになります。本人の言葉をうけとめてあげて、少しずつ肯定してあげましょう。（男性、20代、安房地域）
- いろんなタイプの支援があるのはいいことだと思います。時代が変わり、嫌なら行かなくてもいいんだよ。という時代になった。だからこそ不登校が増えているんだと思う。増えている数字に悲観するのではなく、その子個人が、辛くない形で義務教育を終えられればいいのではないかな。（女性、30代、千葉地域）
- 不登校の生徒を支援する事に重きを置くのでは無く、不登校の生徒を無くす事に試行錯誤した方が良いように思う。不登校を減らすには何が重要なのかは、不登校を経験した人達が、答えを持っているように思う。不登校になった事の無い大人が、いくら考えても答えはなかなか見つからないと思う。（男性、60～64歳、千葉地域）
- 学校は学問だけを学ぶ場ではなく、対人関係も学ぶ必要がある。クラスに1人の先生では難しい事も多いので、教員の人数を増やして、子供を見守り、トラブルに適切に対応できるようにしてほしい。（女性、30代、千葉地域）
- 学校に求められていることが多すぎる。集団生活だけでなく、掃除や配膳やルールを守ることなど、本来家庭で教えても良い内容である。健康に安全に生きていくすべを教える場所とする必要があるなら、勉強以外をサポートする職員を増やすべきである。（女性、40代、東葛飾地域）
- 現在まさに小2の子どもが不登校に近い状況です。低学年だと親が仕事を休まざるを得ず、経済的に厳しい状況です。フリースクールの費用も高額で簡単に通わせることはできません。（男性、30代、葛南地域）
- 不登校問題は子供も辛い、親もとても辛い。先が見えない不安やなかなか人に相談できなかったり、自分だけで抱え込んでしまう。LINEなどで気軽に専門家に悩みの相談やアドバイスとかをしてもらえると、少し楽になるのではないかな？（女性、40代、葛南地域）
- もちろん子供の性質もあると思うが、周りの環境や親との関係性も大きく関わると思うので両親のカウンセリングやセミナーなどの場や親が仕事を罪悪感なく休めたりする制度も作ってあげて欲しい。あと休業保障とかも。（女性、60～64歳、東葛飾地域）
- 子育ては子どもが中心であることを大人が理解することが大切かと思う。子どもにも多様な子がいる。まず、親の愛情を子どもにふりそそぎ、子どもが親から愛されていると感じること。そのためには1才～小学校入学前までの育児が重要と思う。（男性、70～74歳、印旛地域）